高梁川流域学校

一般社団法人　高梁川流域学校

【事務局】〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13－3
TEL：086-527-6248　FAX：086-691-2289
E-MAIL：info@takahashigawa.or.jp　WEB：https://takahashigawa.or.jp

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

高梁川流域学校のご案内

LIFE INNOVATIVE TOURISM ORGANIZATION NETWORK

2021年度版
一般社団法人 高梁川流域学校

高梁川流域学校

私たちは、どんな「形・命・心」を、
流域の未来に残そうとしているのだろう。

たとえば、流域のカタチ。大切に守り残していくことと、しなやかに変化すること。
たとえば、流域のイノチ。人口減少、様々な格差を超えた共生社会を実現すること。
たとえば、流域のココロ。意欲を育み挑戦を生む、やわらかな場所を醸成すること。

男か女か。右か左か。マルかバツか。青いか渋いか。豊かさか優しさか。
官か民か。立場か面子か。組織か個人か。営利か非営利か。

もう、そんな二極では「いま」も「未来」も語れない。
多様な選択肢を把握し、いまより少し遠くに方向を定めながら進んでいく。
そんな「人の営みのすべて」が、流域の未来をつくっている。
つまり、鍵を握るのは、流域のいまを生きる私たち一人ひとりなのだ。

新しい時代は、予期せぬ不自由さを伴って、静かにはじまっている。

この地に生きる私自身が、流域の「形・命・心」をどうしたいのか。
まずは、高梁川流域の「未来」と私たちの「いま」を、問い直すところからはじめよう。

提言は2021年8月に流域で活動するみなさんを対象に行ったアンケートの回答をもとまとめました。

提言

二極で語る時代は終わった。
問い直すところからはじめよう。

新旧代表理事 往復書簡

大久保憲作 と 坂ノ上博史

高梁川流域学校は２０２０年度より代表理事を創業から務めた大久保憲作から二代目の坂ノ上博史に交代いたしました。代表を託した者、受け継いだ者。ここでは、それぞれが託したいことと受け継ぎたいことを往復書簡のやりとりとしてお伝えします。手紙には対談や挨拶文とはちょっと違う空気感、人柄も少し垣間見えるような独特のものがあるかと思います。二人の往復書簡をこっそり読んだような気持ちでお楽しみいただければ幸いです。

分担 分散 協働 自立 協調

なぜあなたを後継者に選んだのか。

坂ノ上さんへ

新旧代表理事の間で往復書簡を始める前に、なぜあなたを後継者に選んだのかを話します。候補者を見渡した時、その方が流域学校の多様な事業とステークホルダーの全体感を把握し正義感と責任感をもって向き合える人かどうか。もう一つは運動に市民目線とビジネスパーソンのスタンスを持てる人かどうかの二点を考えました。10年前に初めて会った時、本で読んだ「社会起業家」とはこんな若者なんだと心がワクワクしましたよ。その後奇しくも同じ運動をする仲間になりつき合いが深まる中で次の代表理事を託そうと決断したのです。能力と人柄が二代目を託した理由です。

一つ目のお題は、流域学校で二代目で変えてほしくないこと。それは流域学校の特徴的な組織でしょうか。

学校の組織…本部がありその周りに実践運動家の役員（理事・監事）がいる組織です。企業ではホールディングス（持株会社）と複数の独立企業のグループ。企業と違うのは本部が管理と事業も主催する事。本部の主催事業には役員が多面的に参画し、役員の連携事業へは本部が支援する…本部と役員の持ちつ持たれつの関係ですね。

流域学校の組織は「分担と協働」を目指す流域志向にとてもマッチしています。発展的に充実して欲しいです。

二つ目は、二代目のここが心配。

坂ノ上さん自身には何の心配もないので、本部の主催事業の事で一言書きますが心配というより希望ですね。

ここ一年半はコロナ禍により、多くの人が集まり勉強し意見交換する倉敷の「高梁川ミーティング」ができませんでした。

私は中央病院の大原記念ホールに著名な講師を迎えて学生や企業人が意見を交換する姿を見るのがとても楽しみでした。

地域運動はともすれば限られた人々の参加になりがちですが、流域学校では多様なステークホルダーが気軽に参加できる場が必要です。

コロナの終息を機にエリアミーティングや、大原ゆかりの倉敷で一年の活動報告を兼ね新たな気付きの場、高梁川ミーティングの開催を希望しています。

一通目の手紙から固い内容になりましたがお許しください。

大久保　憲作

大久保さんへ

お手紙ありがとうございます。公開往復書簡、不思議な感覚ですね。

私が代表として適任かどうか、自分ではわかりませんが、世代を超えて持続する運動（ムーブメント）の流れの一つとなれることは嬉しいです。

流域思考の一つとして、「分担と協働」をキーワードとしてご提示いただきました。私にとって「分担と協働」というと、即ち「インターネット」のことを想像します。私が、大学生になり、倉敷から東京へ行ったのは、1996年なのですが、この年に、Yahoo!Japan のサービスが開始しています。前年の1995年に「Windows95」が発売。たまたま、私もネットベンチャー企業に縁があり、インターネット・バブルの一端も垣間見て、当時、時代の雰囲気が大きく変わる実感がありました。そして、インターネットの基本原理として、「自立・分散・協調」という考え方があることを知りました。

ローカルなムーブメントである「脱・都市集中」「流域志向」と、インターネットの基本原理である「自立・分散・協調」とが合流して、一つの大きな流れとして、大きな変革のSDGs時代の今、うねりを生み出すような予感がしています。

特に継続すべき取り組みとして、リアルに人と人が出会う「高梁川ミーティング」をご提示いただきました。神崎先生の講座にて「ととみち」「博労（馬喰）」という、流域の各地を繋ぐ人の役割があったことを思い出します。

多様な顔の見える繋がりの中で、分担と協働により、地域の持続可能性を考え、実践する。新たな仲間も迎えつつ、流域学校の輪を広げていく所存です。

さて、大久保さんからのお手紙でも、「コロナ禍により・・・」とありましたが、「新しい生活習慣」ということも言われ、あるいは、気候変動や、ICTの発展、意識の変化、SDGs、日本では人口減少、高梁川でも大規模災害が発生するなど、100年に一度と言われるような大きな変化が生じていると思いますが、高梁川流域学校、さらには「流域志向のムーブメント」について、今後、どのような変化や新しい取り組みが必要と思われますでしょうか。コメントを頂けましたら、幸いです。

季節の変わり目です。どうぞ、お体ご自愛ください。

坂ノ上　博史

流域志向のムーブメントに今後必要な変化とは

流域学校はチェンジメーカーに成れるか

坂ノ上さんへ

お手紙読みました。老体の僕を気遣ってくれて有難う。

東京に行ったのが１９９６年ですか。私は25年前のその年に副代表の中村泰典さんとＦＭ倉敷を起業しました。49歳でした。

それから5年が経った頃かな、私にとって高梁川に纏わる不思議な縁が始まりました。これも中村さんがきっかけで、今思えば、流域学校という苗の発芽だったのかなと感じています。

坂ノ上さんの手紙に、学校の着地点、流域志向のムーブメントの変化とその取り組みへの問いがありました。

そうですね、どのような集団、コミュニティであれ、リーダーには変化や進化を促す発言力と行動力が必要です。

日本人は関係者への同調思考が強いから、異論や疑問を心に思っても言わないし、忖度して行動する。だから１００年たっても日本は何も変わらないのでしょう。これが最大の危機です。

流域学校はそこを変えるチェンジ・メーカーに成れますか？

そこで坂ノ上さんにお願いです。

枠組みを変える発言、マイナーチェンジではなくフルモデルチェンジを目指し、グレタさんのように大声を発して下さい。

流域の自治体（職員）には親和協力の精神で境界線を意識しない政策転換を、地域企業にはビジネスのみならず、流域の課題解決に積極的に関わる行動ガバナンスを。どちらも近未来の自分らの為です。

それにはまず流域構成メンバー（住民・行政・企業）の意見交換の場を作ってください。欧州連合（ＥＵ）に倣って高梁川流域連合（ＴＵ）と名付けましょう。

そこは教育、文化、自然、観光、防災、コモンズなどへの流域志向の見解を学び、調整・統一する場です。母体は令和５年に創立70周年を迎える高梁川流域連盟です。流域学校はネットワーカーという役割でしょうか。

流域に住む隣人たちが自らの手で枠組みを変えるうねりを起こしましょう。

遠い過去に芽を出した学校の苗木がやがて大樹となり、いつの日か高梁川流域の、いや日本の地方にとって、ランドマークに成ることを夢見ています。

大久保　憲作

「若さ」とは変化起こそうと自ら企む人たち

大久保さんへ

お手紙、拝読しました。「流域学校は、チェンジメーカーになれるか」、あるいは「枠組みを変える」「うねりを起こそう」との力強いメッセージに、大久保さんの笑顔の裏にある『進取の精神』あるいは『理想に向けた闘志』を感じています。

流域学校とは一つの社団法人の名称でもあるけれども、流域を取り巻き、未来に向けた、ムーブメント（運動）でもあると思います。

新たにしました。高梁川流域連盟との連携、あるいは、産官学金言労など多様なステークホルダーと繋がり参画を促すこと、「声を発すること」「旗を立てること」、事実に基づいた分析・提言、そして、小さくとも確かな成果を残していくことなど、なすべきことは山積しているようです。

「フルモデルチェンジを」とのコメントについて、常々思うのは、「流域学校は、流域を自在に飛ぶタイムマシンになればいいな」ということです。中国山地の森と瀬戸内の穏やかな海の豊かさ、それを繋ぐ高梁川本流の躍動感、支流・枝流に広がる健康的な生活感、それらを広く一望し見渡す爽快さがあり、さらに古代吉備の国から、中世・近世、江戸・明治・大正・昭和・令和まで、時代を超えて、未来からバックキャストできるダイナミックな心の自由さを持って、「今・ここ」での実践を続けていく、そのようにありたいと願います。

「地方の時代」と言われるなか、「流域を単位として取り組む」という発想と実践を知り、その「程よい繋がり感」に納得し、勇気を得たことを思います。そして「高梁川志塾」など取り組みを通じて、若く、意欲的なみなさんの様子を見るにつけ、この方向性が、SDGsと軌を一にし、なおかつ、日本全体の閉塞感を打ち破る道に続いていると、確信しています。ここで言う「若さ」とは、変化を起こそうと自ら企む人たちのことです。

高梁川ミーティングの再開はもちろんのこと、大久保さん達も「グリーンデー」を実施してこられたように、楽しく、明るく、賑やかに、緩やかに参加できるイベントも必要と考えます（仮に高梁川フェスとでも名付けてみます）。コロナが落ち着いた日には、流域の美味しいものを持ち寄って、高梁川の河原でバーベキューなどもしたいですね。

「発言と行動」を旨とし（グレタさんのような熱い発信、あるいはオードリー・タンさんのようなしなやかな仕組みの変革）、自立／自律的な社会・経済・環境の共生圏を目指して、「流域に住む私たち自らの手で枠組みを変える」ことに、流域学校の仲間とともに取り組んでいけることに、決意を新たにしました。なんとも貴重な往復書簡の企画、どうも、ありがとうございました。引き続き、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

坂ノ上　博史

代表理事 他己紹介

大久保憲作さんの

手元ファイルを３冊分、高梁川流域学校の代表理事を交代するにあたり、引継ぎ資料としてコピーいただきました。公式な内部・外部の文書に加えて、大久保さん自筆の手書きメモが大量に含まれています。ロジカルに漏れなく洗い出された経営環境に関する箇条書きがあるかと思えば、情感たっぷりの挨拶文の原稿もあります。大久保さんがご自身お一人の時間に、流域のこと、流域学校のことに真摯に向き合い、これほどまでに考え抜かれたことに、改めて驚かされます。時に大原總一郎を、時にグレタ・トゥーンベリなど引用しながら、大久保さんの抱いた、過去への深い理解と、現状への怒り・嘆き、そして未来への大きな希望と可能性とを、ファイルからその一端を受け取りました。私なりに流域学校の立場で大久保憲作さんを紹介させていただくなら、大久保さんは「知性溢れる真の運動家」であります。今後とも、アドバイスをいただきたく、お願いする次第です。（坂ノ上博史）

坂ノ上博史さんは

ポスト団塊ジュニア世代だ。出会いは東日本大震災の頃、その時は「？なんだ、この若者は！」という第一印象で、早稲田の後輩の中でも相当異色だった。そのころ社会の歪が愈々顕在化し、それらの解決の為に従来の行政や市民運動のみならず、公共の立場に身を置きながらビジネスマインドも併せ持つ「社会起業家」が出現していたが、彼もそこを目指していたようだ。その後メキメキ頭角を現し、流域学校代表理事など社会起業家の旗手に成長した。コロナが未だ収束せず閉塞感が覆う日本では、真のチェンジ・メーカーの登場が待望されている。坂ノ上さんにはその素地が十分あると、私は確信し期待している。

（大久保憲作）

校長挨拶

「高梁川流域学校」の使命

高梁川流域とは、一部の枝流をのぞいて、本流も支流も備中一円で完結する一これは、全国でも珍しい自然と人為の複合関係です。

そこに、独自性の高い文化の熟成をみました。たとえば、古代においては流しとそれを運んだであろう牛の道、中世においては、荒神と荒神神楽、市をつなぐ峠道、近世においては、備中鍬や備中葉（煙草）、ベンガラ、渡り、盆踊りなど。以来、私たちの先祖が連綿と伝承してきた備中人における庶民文化というものです。

しかし、古来不変というわけではありません。砂鉄流しとその流通路、三斎市をつなぐ峠道などは、すでにたどりにくくもなっています。それは、近代文明の発達とともに変化せざるをえなかったことで、誰もが認めるところです。ただ、古墳や寺社などの史跡や伝承建築群などの重要文化財などに比べると、確かな検証もなく忘れ去られたのです。

たとえば、つい半世紀前までは盛んだった煙草栽培と乾燥作業は、現在では見られなくなっています。荒壁造りで特異な建築様式の乾燥場が建ち並ぶ風景も見られなくなっています。ただ、まだ聞き取り調査や写真収集は可能でしょう。

「温故知新」とは、いかに先端技術が発達しようとも不変の真理です。

高梁川流域学校は、民間においての文化考察の場です。備中人たる私たちが、忘れ去られる文化事象をどうみるか。守るべきものならどう伝えていくか。とくに、子どもたちにどう伝えていくか。そうしたことを、ここに集まる人たち皆で考え、話し合っていきたい、と思います。

皆様の、いっそうのご理解とご協力をお願いするしだいです。

高梁川流域学校 校長
かんざき　のりたけ
神崎 宣武

校長・顧問のご紹介

校長

神崎 宣武

民俗学者 旅の文化研究所所長・文化庁文化審議会専門 委員

1944年、岡山県生まれ。民俗学者。武蔵野美術大学在学中より宮本常一に師事。以後、国内外の民俗調査・研究に従事。国土審議会専門委員、文化審議会委員、公益財団法人伝統文化活性化国民協会理事などを歴任し、現在、旅の文化研究所所長、公益財団法人伊勢文化会議所五十鈴塾塾長、岡山県文化振興審議会委員などをつとめる。岡山県宇佐八幡神社宮司でもある。
近著に、『「おじぎ」の日本文化』（角川ソフィア文庫）、『大和屋物語―大阪ミナミの花街民俗史』（岩波書店）、『聞書き 遊廓成駒屋』（ちくま文庫）、『「うつわ」を食らう―日本人と食事の文化』（吉川弘文館）、『近鉄中興の祖 佐伯勇の生涯』（創元社）、『社をもたない神々』（角川選書）などがある。

顧問

澁澤 寿一

認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長

1952年東京都生まれ。行政・企業・NPOの協働で「聞き書き甲子園」を主催。豊田市・トヨタ・NPO 共催の新環境教育プログラム「豊森なりわい塾」実行委員長。真庭市資源循環型事業連携協議会会長。「真庭なりわい塾」塾長。世田谷区教育委員会・教育長職務代理者。國學院大學講師。農学博士。澁澤栄一氏曾孫。

顧問

梶谷 俊介

岡山トヨタ株式会社 代表取締役社長

1957年愛媛県生まれ。小学校2年から倉敷市で育つ。大阪大学大学院工学研究科前期課程修了。1987年岡山トヨタ自動車株式会社入社。2001年代表取締役社長就任。青年会議所や商工会議所青年部で地域活動に携わり、当時のネットワークを活かして現在も幅広く活動。高梁川流域学校顧問。

アドバイザー

合田 哲雄

内閣府科学技術・イノベーション推進事務局審議官

1970年生 岡山県倉敷市出身。92年文部省入省。福岡県教育庁高校教育課課長、国立大学法人化、学習指導要領改訂を担当。初等中等教育課程課長、財務課長等を経て現職。上越教育大学、東北大学、東京大学の非常勤講師。『学習指導要領の読み方・活かし方』『受験のルールが大きく変わる！ 2020年教育改革が目指すもの』等著書多数。

事業紹介

高梁川志塾（第一期）

持続可能な地域に向けて、多様な世代が所属や立場を超えて学習する塾

高梁川の自然や歴史、文化、産業を「フィールドワーク」の教材に、多様な世代が所属や立場を超えて互いに学び、研鑽しあい、高梁川流域での地域づくりや、「持続可能」な地域を担う次世代の人材として成長し、行動につなげることを目指す塾です。
＊高梁川志塾HP https://takahashigawa.or.jp/t-shijuku/

2020年11月3日（火・祝）から2021年2月14日（日）にかけて高梁川志塾の第1期を実施しました。高梁川流域・周辺市町より参加した20名の塾生が学習・実践した成果を踏まえて、自身の掲げる今後のビジョンや各地域での取り組みについてプレゼンテーションを行いました。

ライター講座の開催

高梁川流域はもちろん、自分たちが住む地域の魅力を知り、それを共有する手段として、ブログ・SNSなどによる情報発信を行う人を増やすことを目的に、「高梁川流域ライター塾」を開催しました。
本講座は、地域コミュニティ Webメディア「倉敷とことこ・備後とことこ」の運営手法を題材に、ライティングテクニックだけではなく、地域との関わり方など、行動・マインド面も重視した内容としています。

■2020年度開催実績

参　加　者	参加者：9名 うち、実習修了者5名。 Webライター活動参加申請者4名。
担 当 理 事	戸井健吾

2021年度は、倉敷市「令和3年度高梁川流域地域づくり連携推進事業　採択事業」として、笠岡市での開催が決定しました（主催は一般社団法人はれとこ・一般社団法人かさおか教育DMO）。

資金支援勉強会の開催

高梁川流域及び県内金融機関を対象に「コロナ禍で変化が求められる中、SDGsに貢献しながら、これからの地域をつくるための中小企業・起業家の社会事業進出・起業支援に関する勉強会」と題した2回連続の勉強会を開催し、金融機関の皆さまによる地域づくりへのさらなる参画とそこでの連携の可能性について検討いたしました。

■2020年度開催実績

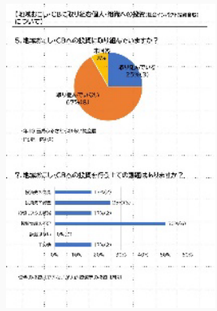
開　催　日	2020年12月8日（火）、22日（火）
参加者対象	6金融機関
講　　師	第1回　深尾 昌峰（龍谷大学 教授） 第2回　野池 雅人（プラス・ソーシャル・インベストメント株式会社 代表取締役）
委　託　先	倉敷市
協　働　先	NPO法人みんなの集落研究所
担 当 理 事	石原 達也

金融機関の調査

高梁川流域及び県内金融機関を対象に「地域おこし・コミュニティビジネス等の促進のための資源仲介・循環に関する取り組みへのアンケート調査」を実施しました。融資、投資、クラウドファンディング等の状況にあわせ、土地建物等の個人資産、電子地域通貨等についても伺いました。

■2020年度開催実績

開　催　日	2021年1月28日～ 3月15日
回　答　数	12件（域外である津山信用金庫を含む）
委　託　先	倉敷市
協　働　先	NPO法人みんなの集落研究所
担 当 理 事	石原 達也

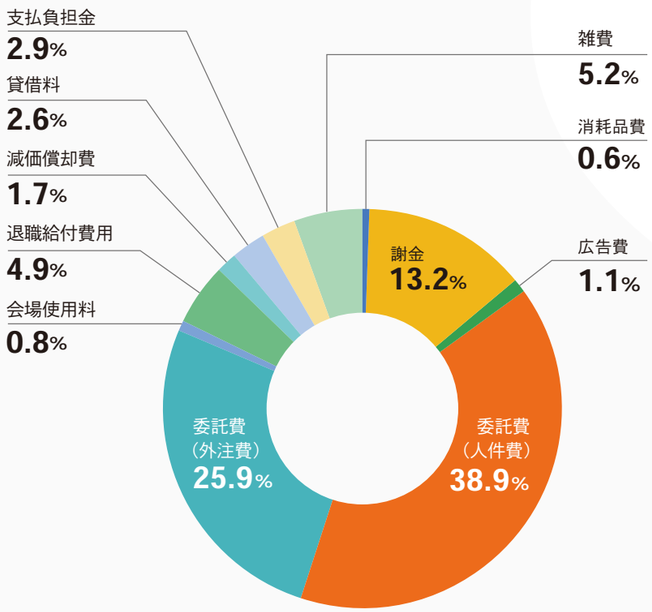


事業紹介

その他の協力事業

一般社団法人高梁川プレゼンターレ	はたらきかた発見マルシェ
特定非営利活動法人倉敷町家トラスト	町家deクラス
特定非営利活動法人 岡山 NPO センター	くらしき SDGs ネットワーキング事業
一般社団法人チカク	0歳児の発達支援に特化した地域拠点事業 ママぱれっと
きび工房「結」	こども造形ひろば 高校生によるまちの匠への「聞き書き」
ミズシマ・パークマネジメント Lab.	Green Gift(地球元気プログラム:東京海上日動協賛) Park(ing)Day
一般社団法人はれとこ	ライター養成講座
公益財団法人水島地域環境再生財団	みずしま滞在型環境学習コンソーシアム

事業費支出内訳



2020年度実績データ

高梁川志塾(第1期)
卒業生20名

2020年度決算データ

正味財産増減計算書(令和2年6月1日から令和3年5月31日まで)

(単位:円)

科目	当年度	前年度	増減
1. 計上増減の部			
(1)経常利益			
事業利益	101,100	13,000	88,100
受取補助金等(倉敷市)	9,000,000	8,585,400	414,600
受取負担金・寄付金	252,000	378,611	△126,611
経常収益計	**9,353,100**	**8,977,011**	**376,089**
(2)経常費用			
事業費計	8,458,292	2,569,332	5,888,960
管理費計	1,822,222	5,222,751	△3,400,529
経常費用計	**10,280,514**	**7,792,083**	**2,488,431**
当期計上増減額	**△927,414**	**1,184,928**	**△2,112,342**
2. 計上外増減の部			
(1)計上外収益			
受取利息	21	8	13
計上外収益計	**21**	**8**	**13**
(2)計上外費用			
計上外費用計	**0**	**0**	**0**
当期一般正味財産増減額	**△927,393**	**1,184,936**	**△2,112,329**
一般正味財産期首残高	**3,765,282**	**2,780,346**	**984,936**
一般正味財産期末残高	**2,837,889**	**3,765,282**	**△927,393**

2021年度組織図・役員紹介

総会

理事会

校長・顧問

監事

塩飽 敏史

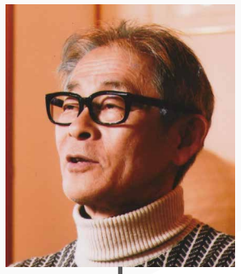
公益財団法人水島地域環境再生財団（略称：みずしま財団）の理事・研究員。瀬戸内海の環境再生を目指した海ごみ問題の調査研究・啓発活動や、水島の大気汚染公害の教訓を持続可能な社会づくりに活かす環境学習活動などを担当。

代表理事

坂ノ上 博史

1978年倉敷市生まれ。コワーキングスペース住吉町の家分福　大家。（一社）高梁川プレゼンターレ　代表理事。民間企業取締役を経て2010年独立。東日本大震災の支援活動で倉敷町家トラスト中村泰典氏と出会い地域活動に参加。大久保憲作氏の後任として流域学校の2代目代表に就任。

副代表理事



副代表理事

理事

中村 泰典

1951年倉敷市生まれ。音楽愛好家。NPO法人倉敷町家トラスト 代表理事、倉敷伝建地区をまもり育てる会 事務局長、NPO法人全国町並み保存連盟 常任理事。「土地の夢を起こす」をキーワードに環境活動～町並み保存運動まで幅広い市民活動に関わっている。

石原 達也

社会の「仕組み屋」として、まちづくりや社会課題解決の仕組みづくりに取り組む。岡山NPOセンター・代表理事、みんなの集落研究所・代表執行役、SDGsネットワークおかやま・会長、災害支援ネットワークおかやま・世話人等々。

松原 龍之

倉敷市出身、2012年にUターン。不動産会社を経営する傍ら、ゴミ拾いボランティア、商店街でカフェ経営、移住支援など住みたいまち・住み良いまちとは何かを実践。岡山経済新聞・編集長として、岡山の現在を日々発信する。

森光 康恵

総社市在住。自宅を自ら改装、古民家風ギャラリーカフェきび工房『結』主宰。備中「聞き書き」実行委員会事務局。そうじゃぼっけえ造形の会事務局。高梁川流域音楽会「奏KANADE」事務局。

赤木 美子

一般社団法人チカク 代表理事。会員制ビジネス誌編集、経済紙記者、大学広報、テーマパークの企画・広報宣伝を経て現職。子育て支援を中心に、社会の課題を照らし、当事者目線の活動を行っている。保育士、産業カウンセラー、防災士。

古川 明

おひさまエナジーステーション（株）、日本ケミカル機器（株）顧問、倉敷芸術科学大学非常勤講師、みずしま滞在型学習コンソーシアム副座長、水島の活性化を目的とするミズシマ・パークマネジメント Lab.の代表理事等、幅広い活動を展開中。

戸井 健吾

一般社団法人はれとこ代表理事。大学卒業後、IT業界に就職し、2度の転職を経ながら、15年間主に大企業向けのシステム開発に携わる。2018年に独立。現在はICTとWebをキーワードに活動を行っている。

相談役

大久保 憲作

1947年倉敷市生まれ。高梁川流域学校前代表理事。倉敷木材 会長「木と共にある暮らし」を提唱。エフエムくらしき 社長
「情報は地域を育てる栄養素」の観点からまちづくりと防災に注力。30代から企業人としてのまちづくりに参加している。

組織情報

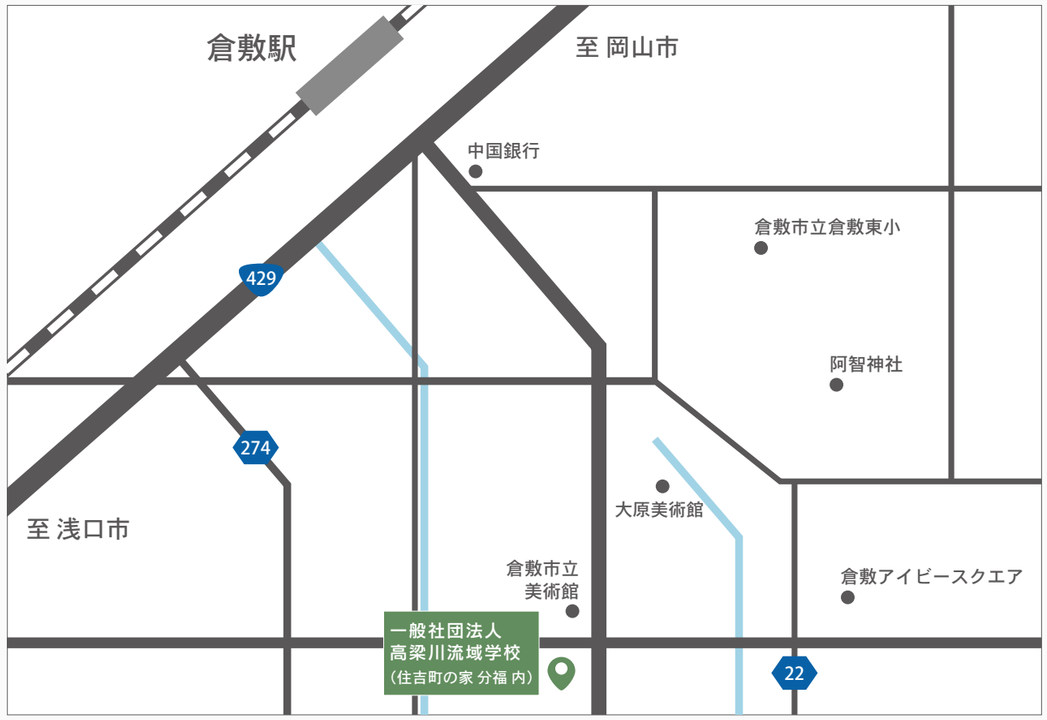
高梁川流域学校
Life Innovative Tourism Organization Network

一般社団法人 高梁川流域学校

代表理事　坂ノ上博史

〒710-0046
岡山県倉敷市中央2丁目13－3

TEL　| 086-527-6248
FAX　| 086-691-2289
E-mail | info@takahashigawa.or.jp
WEB　| https://takahashigawa.or.jp/



高梁川志塾の塾生募集

高梁川志塾とは、高梁川の自然や歴史、文化、および産業を「フィールドワーク」の教材に、多様な世代が所属や立場を超えて互いに学び、研鑽しあい、高梁川流域での地域づくりや、「持続可能」な地域を担う次世代の人材として成長し、行動につなげることを目指す塾です。
今年度より第1期を開講したばかりの新しい塾ではございますが、高梁川流域学校HPやFBにて、各期の塾生募集のお知らせをしておりますので、ぜひご参加ください。
＊高梁川志塾HP https://takahashigawa.or.jp/t-shijuku/

111 人委員会の募集

大原總一郎氏の高い理想を基に高梁川流域連盟が設立されて61年目、岡山県美星町出身の民俗学者神崎宣武先生を校長に迎え、高梁川流域学校が開校しました。平成27年6月のことです。神崎校長がいつも言われていること。

風土が文化を育んできたのです。風土は自然環境を言い換えることができます。
文化とは、そこでの暮らし方のクセのようなものと言い換えてもよいでしょう。
私達は、高梁川流域の風土、歴史や文化を学び、大事に次の世代に伝えなければならないのです。

「111人委員会」の名称の由来は、新見市花見山の源流から滔々と流れ、倉敷の水島灘に至り瀬戸内海に注ぐ母なる川「高梁川」の総延長111キロメートルに因んでいます。委員は総勢111人、高梁川流域学校の理念に賛同し、行事に参加する支援者であると同時に、厳しいご意見番であって欲しいと考えています。

そこで、私達の活動の趣旨に賛同し、支えて下さる賛助会員様、団体・個人の方からのご寄附を募集しています。ぜひ委員として、優れた地域教育プログラムを次世代につなぐ高梁川流域学校を応援してください。事務局宛にお名前・ご住所・お電話番号をお知らせいただければ、入会申込書をお送りいたします。